

---

---

特別企画

---

---

## 事務局長20年の思い出（前編）

小田中 徹也

### I. 事務局長退任

1983年4月から2004年3月まで、私は20年の永きにわたって近畿病院図書室協議会(病図協)の事務局長を務めさせていただきました。2004年3月の総会をもって晴れてお役ご免となった時、20年間の拘束から解かれたようなある種の解放感を味わったものです。20年という節目、当院の独立行政法人化などもありましたが、何よりも今のうちに病図協の円滑な世代交代を図りたいというのが退任の最大の理由でした。

私が病図協の運営を引き継いだ昭和58年度(1983年)は、会員数が60機関で予算額は約200万円でした。最後の平成15年度(2003年)は会員数が126機関で予算が550万円余りだから、大過なく会を運営してきたと密かに自負しております。しかしそれも、歴代の会長をはじめとする役員や、会員の皆さまの長い間のご協力・ご支援のおかげであったことは、申すまでもありません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、2004年春、当院は独立行政法人化に伴い病院図書室も附属看護助産学校図書館と組織上は合体することになり、私はそのための規程や資料の整備を進めていました。ようやく一段落した2004年の夏、そんな解放感に浸る余裕もなく、会誌編集部から事務局長在任20年間の回想記を書いてほしいと頼まれました。長い間お世話になった方々へのお礼の意味もこめて何か書かねばとは思ってみたものの、回想記を書くには気恥ずかしく、イザとなると話題が多すぎて、気がつくとも1年後の今日になってしまいま

した。

多分に私情も交えて、とりとめもなく書くと思いますが、10年間に区切りに前後二回にわたる思い出話にお付き合いいただければ幸いです。

### II. 東山会館

病図協は1974年11月に発足したので、私が事務局長に就いた1983年は発足10年目でした。3月の総会時に、京都市の東山会館で創立10周年記念式典を執り行いました。特別講演では樺島忠夫大阪府立大学教授をお招きし「情報時代と日本語」をお話していただいたことが印象に残っています。ちなみに、東山会館はその後、京都市国際交流会館に変わりましたが、現在も三条蹴上にあります。周囲には南禅寺、岡崎公園、インクライン跡、蹴上発電所などがあり、風光明媚で好評を博した会場でした。以後、20周年、25周年、30周年の記念行事の舞台となり、病図協のいわば「聖地」ともいえましょう。

ところで、病図協は最初の10年間、初代の川原佳子さんから山室真知子さん、加島民子さん、松本純子さんまで事務局長は4代続きました。皆さん、私の先輩に当たる発足時からのメンバーであり才媛であったため、賢明にもそれぞれ1～3年間で交替されていました。10周年を機に第5代を継いだ私が20年間の永きにわたったことは、愚かだったのかお人好しだったのかと、悔やまれてなりません。

### III. 歴代会長

1983年3月の総会で役員が改選され、4月からの昭和58年度は事務局長に私(小田中徹也)

が選出されました。それに伴って、会長は菅原努先生（国立京都病院院長）が就任されました。当時の会則では、事務局長は幹事の互選で定め総会での承認を得て決まったのですが、会長は「事務局長の所属する病院の病院長とする」とされていました。この会長選出法は、それまでに何度か開催された幹事病院連絡会の位置付けとあいまって疑問と批判が出ていました。そのため、この年度に現行会則に改め「会長、事務局長は役員会で選出し、総会において会員の承認を得なければならない」とし、翌年度から施行しました。

その結果、昭和59年度（1984年）の会長は安富徹先生（国立京都病院院長）でしたが、昭和60年度（1985年）からは梅垣健三先生（星ヶ丘厚生年金病院院長）が就任され、初めて事務局長とは別の会員機関から選出されました。梅垣先生には5年間、会の組織運営について特に対外交渉のことなど多くを教えていただきました。星ヶ丘での会見後に「軽く一杯」とよくお誘いがかかり、親しくしていただいたことが懐かしく思い出されます。その先生も2000年11月に永眠されました。嗚呼。平成2年度（1990年）からは白方誠彌先生（淀川キリスト教病院院長）に交替し、1995年1月の阪神淡路大震災に遭うまでの5年間、会の運営を熱心にご指導いただきました。白方先生の後を継がれた牧野尚彦先生（兵庫県立尼崎病院院長）以降については後編に譲ります。

会長と事務局長が異なる病院では意思疎通や連絡に不便が生じるのではないかと、当初は懸念もされました。しかし、お互いが別の所属機関というフリーな関係であったことが、かえってよかったのではないとも思っています。歴代会長の先生方は図書館へのご理解が深かったからか、会のために本当によく尽くしてくださいました。

#### IV. 運営体制

1983年の会則の大幅な改定は会長や事務局長

の選出法変更だけでなく、それまでの「幹事病院連絡会」を新たに「役員会」として規定しました。1983年以前は、病院管理者と図書館員が病図協の活動を審議する場として幹事病院連絡会を随時開いていました。特に、後述する日本医学図書館協会への「団体加入」問題に関しては、病院管理者も交えて意見を統一する必要性がありました。しかし、会則上の規定がないため、後にはこの会議そのものの位置付けや役割が曖昧との声も病院管理者から出ました。そこで、これを役員会として年に一回定期的に開催し、協議会活動の審議と次年度の会長、事務局長を選出する役割を担うことにしました。

会則の大幅な改定は、こうした懸案事項だけでなく運営体制や事業活動全般にも及び、「事務局」内に事務局長のほか総務と会計を置き会全体の運営に当たることにしました。また、各事業活動は「事業部」制を敷いて幹事と会員図書館員で構成し、研修会活動、会誌発行、統計調査などに当たることにしました。1988年には「業務分掌規程」としてまとめ、会員への周知や業務の一貫性を図っています。現在の病図協の運営や活動は当時の整備を引き継いでいますが、今後は例えば外部への業務委託による役員の大幅な負担軽減や輪番制など、時代に合わせ検討されていくものと思っています。

#### V. 事業活動

私が事務局長を引き継いだ当初の大きな事業は10周年記念事業の完成であり、これには病図協内外の多くの方々の協力がありました。そのうち、1984年に発行した『医学資料の整理と利用－病院図書室マニュアル』<sup>1)</sup>は、380ページに及ぶハードカバーの大著でした。当時、慶応義塾大学教授だった津田良成先生が監修を快く引き受けてくださり、編集担当の首藤佳子さんと私が何度か新宿区のご自宅を訪問した折のご厚情やご指導が、昨日のこのように思い出されます。また、本書の発行はトシマ参考図書の大嶋輝彦氏の支援があってこそその事業でした。

当時、たびたび当院を訪問されましたが、いつも遠慮がちにニコニコされていました。遅々として進まない執筆や編集に、内心は業を煮やしておられたのだらうと思うと、今になっても謝りたい心境です。

次に、1985年に完成した『医学雑誌総合目録1985』は、初めてのコンピュータ処理による目録編集でした。パソコン普及前の当時は、大型計算機（RAM/5MB、HD/2.4GB）を使用したため、大阪大学中ノ島図書館の中嶋聞多氏や大阪回生病院の電算課から大きな支援と協力を得ました。さらに、この事業を担当した大阪回生病院の加島民子さんの働きがなんといっても大きかったといえます。

またこの頃、病図協会員への特別なボランティアサービスを有志の会員機関に委託していました。1988年の『業務分掌規程』にこの会員委託のサービスセンター利用規定も含まれています。その中には、図書室実務研修病院のように現在も活動中のものと、業者委託となった協議会資料センターのほか、BLLDセンター、コンピュータファイル管理センター、規格用紙サービスセンター、目録調査センターなどその役割を終えたものがあります。今は会員のこうした積極的姿勢が乏しいとも思いますが、環境が厳しくなったこともあるのでしょうか。

ところで、病図協は京都から神戸にかけての地域の病院が集まって発足したことから、名称に「近畿」の名が冠してあります。ところが発足して10年余りを過ぎると、近畿以外の病院や教育機関もかなり入会されていました。東は神奈川から西は福岡までの地域的な広がりを示しましたが、特に東海地区からの入会が多く「一大勢力」ともいえました。そうした頃の1989年、会の名称から「近畿」を外し、会員構成を反映する名称に変更して、活動の場を広げてほしいとの要望が東海地区の会員から出ました。これを受けて、名称について全会員へアンケート調査したところ、名称変更反対あるいは時期尚早という回答が過半数でした。その中には、

「近畿」は「関西」のように単に一地域を表す用語ではなく、歴代の皇居所在地とその近隣の国々という特別の意味があり固有名詞とあってほしい、との反対理由もありました。それもひとつの考えではありましたが、やはり活動の範囲を全国的な規模に広げると宣言するには躊躇があったといえます。ただ、この要望に応えるため1989年の名古屋第一赤十字病院での第一回から始めて、1998年の松阪中央総合病院での研修会までの10年間にわたる東海地区での研修活動は、微力ながらも地域の活性化に繋がったと思っています。

会誌は病図協の大きな事業のひとつであり、予算も桁違いの大きさです。発足当初は毎月発行の『会報』だけでしたが、「さらに論議を深め、関係者の関心と交流を強めん」<sup>2)</sup>として、1980年に会誌『病院図書室』を創刊しました。そして「会報」は1992年の100号をもって終刊とし、1993年からは「病院図書室」12巻に統合して、それまでの年刊を季刊化して再出発しました。会報にしる会誌にしる、継続発行は経費と多くの労力を要するため、何度も人材確保を要望されました。そうした中で、会誌編集部は15周年<sup>3)</sup>、20周年<sup>4)</sup>、25周年の記念号<sup>5)</sup>を発行し、病図協の節目ごとの歴史が一望できるように図っています。この拙稿も、これらの記念号と総会報告の掲載号を頼りに何とか筆が進んでいます。

## VI. 総会講演

会員への教育・啓蒙活動として、病図協では研修部が中心となって研修会や勉強会あるいはセミナーを年に3、4回開催しています。ただし、総会は事務局が担当するため、総会講演に関しては思い出も一入の感があります。例えば、前述の創立10周年記念総会講演では樺島忠夫先生を招きましたが、それ以降も、ツテを頼りながらも次の表に挙げるそうそうたる先生方をお招きしました（敬称略）。

1985年：林寺 忠(国立京都病院小児科医長)

「パソコンは何ができるか？  
どのように使うのだろうか？」

1986年：柴田正夫（関西学院大学講師）

「行政改革と図書館員」

1987年：藤井千年（尼崎市立北図書館長）

「コンピュータとレファレンスワーク」

1988年：亀山正邦（住友病院長）

「能のはなし」

1989年：須貝哲郎（大阪回生病院皮膚科部長）

「加齢と皮膚」

1990年：福間誠之（京都第一赤十字病院

脳神経外科部長）

「加齢と脳死と医療倫理」

1991年：白方誠彌（淀川キリスト教病院院長）

「海外医療協力について」

1993年：檜 学（島根医科大学前学長・

京都大学名誉教授）

「科学の芽ばえとその発展」

1994年：東 幸生（弁護士）

「医療と医療訴訟」

毎年度の総会準備は議案書の作成、選挙準備、会計監査、出席者の確保など、率直にいうと味気ない作業ですが、この総会講演の準備だけは楽しみでもありました。こうして一覧すると、テーマはやはりその時代を反映しているようですし、講演はもとより講演に至るまでの先生方との打ち合わせが目につかびます。

## VII. 日本病院会全国図書室研究会

日本病院会主催の全国図書室研究会は、関西では1979年に初めて大阪（大阪医師会館）で開催されました。そして翌々年、この研究会を支えていたと思われる病院図書室研究会から、関東と関西で交互に開催したい旨の提言がありました。これに対し、病図協では「日本病院会からの要望があれば、当会の事業活動と調整しながら出来るだけ協力していく」ということになり、1979年から実質、関西でも隔年開催されました。次は、私の事務局長時代の開催一覧です（敬称略）。

1984年：大阪市・大阪電信電話会館／シンポジウムと講義

1986年：京都市・京都教育文化センター／特別講演：松村多美子（図書館情報大学教授）「情報ネットワーク」

1988年：大阪市・大阪科学技術情報センター／特別講演：白方誠彌（淀川キリスト教病院院長）「これからの医療と病院図書室の役割」

1990年：京都市・くに荘／特別講演：前川恒雄（滋賀県立図書館長）「いま図書館員として」

1992年：神戸市・兵庫県立県民会館／特別講演：鶴見俊輔（評論家）「臨死の読書と回復期の読書」

開催の形態は日本病院会との共催という形をとりましたが、関西での開催であるため、企画や準備、会場確保などすべてを病図協が担当しました。研修の一環としたため研修部が中心となり、共催特有のご苦勞もおかけしました。今こうして振り返ると、前述の総会講演同様、特別講演には著名な講師の方々のお名前が挙がっています。その中で、滋賀県立図書館で前川恒雄先生にご挨拶する山室眞知子さんの幸せに満ちた姿が、今は懐かしい思い出となっています。

その後、この全国図書室研究会は関西での開催はなくなり、名称も「全国図書研究会」となって、東京での開催の共催名義だけの協力となりました。そして、昨年度（2004年）からは開催中止となったことを聞くと、他団体のことながら一抹の寂しさを覚えるものです。

## VIII. 日本医学図書館協会

1927年に創立された「官立医科大学附属図書館図書協議会」に端を発する日本医学図書館協会（JMLA）は、全国の大学医学部、歯学部や研究機関、医療機関などの図書館を擁する日本で最大の生命科学系図書館ネットワークです。また、日本における生命科学情報の最大の

情報リソースでもあることから、その会員図書館には病図協の会員も日頃の文献入手で、大いにお世話になっていることと思います。

JMLA とりわけ地区組織である近畿地区医学図書館協議会と病図協は、会の発足以来、時には喧嘩もしながら親密に交流・連携してきました。私も事務局長時代はオブザーバーとして、できるだけ地区例会に出席し、JMLA の動きを興味深く拝見しましたし、求められれば遠慮なく発言もさせてもらいました。おまけに、会議後の飲み会までお付き合いさせていただくなど、個人「会員並」の扱いを受けたと喜んでいます。さらに、年に1回の総会も病図協を代表して積極的に出席し、挨拶廻りとともに、全国の医学図書館員の方々と知己を得る幸運に恵まれました。

私が事務局長に就く前の1980年、JMLA の第51回総会において「病院図書室を含むネットワーク形成の推進」が可決されました。これを受け、近畿地区では地区協議会と病図協の間で病院管理者も交えた大規模な懇談会が数度開かれ、活発な討議が交されました。事の重大さから、病図協内では管理者と図書館員各4名の計8名からなる専門委員会を設置し、1年間これに取り組みました。そして、会員内での調整はあるとしたものの、翌1981年、JMLA へ「団体加盟」の要望書を提出して回答を待ちました。これに対して JMLA 内では意見の一致がなかったのか、その後返答はなく、1988年の第58回総会において「病院図書室とのネットワーク形成の方針」が決議されました。これは「入会加盟」ではなく、全国8地区ごとに「継続的な協力支援体制」を形成することであり、近畿地区では「連絡委員会」の設置が JMLA 側から提案されました。しかし、その性格について両者の見解が一致せず、これを辞退する結果になりました。一方、東日本を中心に県単位の医療系機関の図書館ネットワークが幾つか発足したことから、この時期はネットワーク化が大きな潮流だったのかもしれませんが。

JMLA はその後、1994年に入会基準を撤廃し、1995年には個人会員制度を導入しました。その昔、「ハードルの高い入会基準は、努力目標であり、互惠互助による等質な図書館協力の前提である」と説教されていた頃を思うと、隔世の感があります。

## IX. 創立20周年記念事業

日本の医学・医療系図書館ネットワークには機関加盟制と個人会員制があって、両者一長一短があると思います。最近はその折衷型もあるようですが、内部でどのように整合性を保っているのか興味深いところです。病図協は機関加盟制をとり、施設長の名義で入会します。機関加盟制を採った最大の理由は、相互貸借において担当者が所属する組織の資料を扱うことにあります。別の利点は、会費も公費負担であるため、発足当初は年間2千円だった会費が、1986年には1.5万円になり、2000年には3万円へと大胆な右肩上がりの値上げが可能でした。また、ネットワーク活動を個々の図書館機能の一環つまり業務と考えるため、研修会などへの参加費も公費、出張扱いのはずです。現実には、そんなに甘い病院ばかりではありません。

1993年、そんな病図協に一举に20機関の入会があり、近畿地区外の会員も1/3にまで膨れ上がりました。この背景には、製薬業界の営業活動自粛つまり文献の取り扱い中止があり、病院図書室への期待がにわかになりました。学会発表のスライド作成のために、漢字 Talk 7 の Macintosh が図書室に設置され始めたのもこの時期です。また、CD-ROM 版の MEDLINE や医学中央雑誌を MS-DOS 上で、図書館員だけでなくユーザーが日常的に検索するようにもなりました。こうした病院図書室の変貌が全般的な図書館員の処遇改善になかなか結びつかなかったのが、今もって残念です。なお、病図協では円滑な相互貸借業務に対応するため、この年から所在目録の「現行版」を毎年発行することになりました。

そして20年目に入った1994年には、会員数は103機関となり、11月には京都市国際交流会館において白方会長の下、「創立20周年フォーラム」を開催しました。記念講演「老いを考え死を学ぶ」で、柏木哲夫先生（大阪大学教授）はプラス思考でとらえる「老い」を教えてくださいました。また、シンポジウムにおける辰巳治之先生（札幌医科大学助教授）のお話「インターネットコンピューティングの紹介とそのバックグラウンド」は、インターネットを第二のルネサンスととらえて、今日のインターネット時代を予言的中されました。さらに、この記念フォーラムでは京都南病院の軽音楽部の皆さんが懇親会を盛り上げていただき、図書館員の集会には珍しく生演奏をバックに踊り明かして、20周年を華やかに祝いました。

こうして、前半の10年を今振り返ると、いわ

ば牧歌的な10年間でした。踊り浮かれた晩秋の夜には思いもよらなかった翌年（1995年）1月の「阪神・淡路大震災」と、その後の激動の10年は、後編で語らせていただきます。

#### 参考文献

- 1) 津田良成, 近畿病院図書室協議会. 医学資料の整理と利用－病院図書室マニュアル. 京都: トシマ参考図書; 1984.
- 2) 小河一夫: 雑誌「病院図書室」の発刊に際して. 病院図書室. 1980; 1 (1): 1.
- 3) 特集: 設立15周年記念号. 病院図書室. 1989; 10: 1-131.
- 4) 特集: 20th Anniversary. 病院図書室. 1994; 14 (4): 123-220.
- 5) 特集: 25th Anniversary. 病院図書館. 2000; 20 (4): 127-229.

